とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

☆　第　２９　号
☆2023 年（令和 5 年）
10 月 10 日　発　行

事務局（連絡先）〒277-0014　千葉県柏市東 3-8-34　柏第一宣教バプテスト教会
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
＊＊＊＊＊＊　Eメール　kmat27aiko@gmail.com　　携帯電話 09061674553

★ 茶の花忌近づく

いよいよ 10 月 26 日の茶の花忌が近づいてきました。列席できる皆様との再会を楽しみにしています。

時：2023 年 10 月 26 日（木）
場所：八木重吉生家（八木重吉記念館）
日程：
１２：３０　墓前礼拝（司式　牧野信次牧師）
　中庭へ移動
１３：００八木重吉を偲ぶ会（敬称略）
　　司会　青木幸雄
　１３：００　茶の花忌準備委員長挨拶　八木幹夫
　１３：１５　茶の花忌に寄せて　　杉浦信男、苅部幹央、神林由貴子
　１３：４０　詩の朗読　ちえの環
　１３：５０　ギーター弾き語り　YO-EN（ﾖｰｴﾝ）
　１４：１０　重吉詩の身体表現　武蔵野美術大学学生
　１４：３０　休憩
　１４：５０　館長挨拶　八木明男
　１４：５５　事務局より報告　小林正継
　１５：００　終了

★八木重吉の愛好者の紹介

前号で、書家の故高野俊峰さんを紹介しましたが、今回も続けて何人か紹介します。まず、合唱団の合唱曲に八木重吉の詩を取り上げて下さり、招待を受けて愛好会の数人で聞きに行ったことから、会とつながっている及川芳子さんです。「八木重吉との出会いとその詩の魅力」の原稿として寄せて下さったものをこの紙面でも紹介しておきます。及川さんは、横浜にお住まいで、新声会合唱団に属し、東京中心に活躍されています。

・・・

な声でどんな技術で表現しようか…といった所が、勉強にもなり、難しさもあり、また面白さ、でありました。

柳川氏は１９５９年に「八木重吉の詩による五つの小品」と題した女声合唱曲を作曲しました。そして２０１７年、その混声合唱版を出版※、新声会合唱団が初演しました。その時私はピアノ伴奏を担当しました。

その中の詩は、

① 霧がふる（秋の瞳より）
② 木（貧しき信徒より）
③ ちいさいふくろ（秋の瞳より）
④ 白い雲（秋の瞳より）
⑤ 終曲（寂寥三昧より）　　です。

出版にあたり、柳川氏は次のように述べています。

「秋の瞳」「貧しき信徒」の二詩集を編んだだけで逝った八木重吉だったが、短詩とはいえ、二千篇余の草稿を残している。烈しい恋愛そして二人の子供への愛、詩作、信仰（聖書を唯一のよりどころとする厳しいキリスト教徒）に心を注ぎ、二十九歳の若さで此の世を去った。温かい平和な家庭と教師生活であったが、心の底にたまる孤独と悲しみは詩の奥から読み取ることが出来る。七十年余り私の座右の詩集の一つである八木重吉の詩から十数曲の作品の一つが、合唱曲集『秋』そして『夕焼』である。

この合唱曲の初演をきっかけに、合唱団で八木重吉記念館を訪問したり（後日出版譜や CD を寄贈させて頂いたり）しました。また町田で行われた展覧会にも有志で行き、八木重吉の生涯や様々な詩に触れました。愛好する会事務局の小林正継さんにも、新声会合唱団の演奏会にご来場頂き、この合唱曲を聴いていただきました。本当に感謝です。

私は中でも特に「白い雲」が好きです。

秋のいちじるしさは　空の碧をつんざいて　横にながれた白い雲だ
なにをかたつてゐるのか　それはわからないが
りんりんと　かなしい　しづかな雲だ

秋がいちじるしい⁈　空が真っ青なことを碧（みどり）というんだ！　雲がつんざく⁈　りんりんと　なのに、かなしい？…全てが私にとって新鮮で驚きの言葉づかいでした。重吉さんは秋が大好きで、秋の雲が大好き、というのが本当に私の中にインプットされてしまって、今でも秋になり青い空と雲を見ると重吉さんを思い出します。

音楽畑の人間で、文学的素養もなく、「詩の鑑賞・初心者マーク」の私が言うのも何ですが、重吉さんの詩は、余白が多く読みやすいです。余白、とは実際の紙面の余白、ひらがなが醸し出す優しい余白、自由に解釈できる心の余白、ちょっと別世界に行ける余白、忘れていた大切なことをふと思い出させてくれる余白…、とでも申しましょうか。そういうところに、魅力を感じております。

※柳川直則氏　昭和七年生　東京芸大声楽科卒
一九五七年より新声会合唱団を主宰。電気通信大グリークラブ、東京大コーロソーノ合唱団、東京女子大コールコンセンティオ、東工大シュワルベンコール、山脇短大、日本航空等で長年にわたり合唱指導者として活動。現在は新声会合唱団で活動中。合唱作品多数。

※混声合唱曲「八木重吉の詩による五つの小品・秋」は新声会合唱団より二〇一七年出版しました。
（お問合せ・及川（045-592-0512））

・・・

次に、梶川泉一郎さんです。私にとって灯台下暗しと言えるすばらしい研究者です。実は八木重吉を愛好する会の活動に何回も参加してくださっていた地元柏の人で、柏市文芸部というグループの主要メンバーとして活躍していました。10 年前ぐらいから会報も送っていました。八木重吉が 1 年余り生活し最高揚期の詩を書いていた千葉県柏市の地元民ですから、重吉の詩に映し出された柏の自然がまだ豊かに残っていた時代を肌身で知っています。柏の隣の詩に住む私も、葛飾の自然、広くは武蔵野の自然と言える木立や田園風景を幼少期から知っているので、重吉の詩を読んで良く理解できる喜びを感じていましたが、梶川さんは、自然をうたった重吉の詩 1 つ１つかも、柏のあの辺をうたっているのだと深い理解が出来ます。最近私が深く感じ始めていた、柏の自然をうたいながら、故郷相原の自然を重ねて歌っているのだという感覚を、梶川さんはすでに 30 年前に捉えて、相原周辺を足で散策していたのです。柏の愛好会が出来てすぐ詩碑「原っぱ」も建立されましたが、その頃から梶川さんは八木重吉の詩に興味を持ち、深く読み込み、愛好会 10 周年の頃に、柏と相原を重ねて詩を鑑賞研究し、文章にしています。柏市文芸部の機関誌『かしわ文学』に素晴らしい文章を書いています。現在、その書いたものを再度まとめる方向に向かっています。今回は、ほんの一部分（平成 12 年筆）を、断片的に紹介しておきます。

・・・

（中略）　今回で二度目の相原行きである。（中略）偶々手に入れた地元の「相原地域商業活性化の会」の人が作成した「玉のよこやま道まつり」の散策図を手がかりに、相原駅から重吉の生家まで歩いてみることにした。「玉」と言えばよく重吉詩にも出て来る言葉だが。

駅の西側から出発していくと、すぐに「観音山」入口の→が目に入ったので安心した。そのコースを登って行くと、左手側に雑木林があり、道沿いの斜面にはところどころに篠竹が生えているところがあった。重吉詩の題材ともなっているあの「しのだけ」だ。

しのだけ

この　しのだけ　ほそく　のびた　なぜ　ほそい　ほそいから　わたしのむねが　痛い（『秋の瞳』）

（以下省略）、

【１柏の原風景、２ふるさと相原、３大地の呼吸と静寂、3 部構成の中の、２から抜粋】

・・・